

もし今、あなたがこの記事を、朝の通勤電車の中や昼休みの職場で読もうとしているのだとしたら、ちょっと待っていただきたい。いくぶん、「夜向き」のお話なので……。

朝駆け!?! 年少「徳島市長」と の奇妙な関係

特集

というわけで、のっけから何ではあるが、究極のエロスは何か。一説によるとそれは「タブーの侵犯」だという。禁じられた遊びほど熱く燃え盛るもの。互いの立場を顧みないロマンもまた、禁を破る快感はこの上ないに違いない。「ふたりの関係について聞かせてください」

本誌記者がそう問いかけても、その女性には終始暗き無言を貫くばかりだった。まるで自身が「禁忌」を犯してしまった現実から目を背けるように――。

少(2020年4月6日付朝日新聞)
徳島市長に36歳内藤氏 女性で史上最年少(同日付読売新聞)
昨年、徳島市は全国に誇る阿波踊り以外で久しぶりに「全国ニュース」を提供した。政治家の苦行、また多様な人材の登用が求められる令和の時代において、女性としては史上最年少となる市長が誕生したのだ。
内藤和子市長。
東大出身の才女。市長になる前から地元・徳島のまちづくりに尽力した郷土愛の持ち主。その上、大学在学中に、視力障害や痺れなどの異常感覚を伴う難病「多発性硬化症」を発症しつつも、薬の服用を続けながら市長選に挑んだ精神力も持ち合わせる。まさに多様性を体現した存在であり、メディアが彼女に注目するのも当然だったと言えよう。だが昨年9月、そんな内藤市長にある「疑義」が呈される。彼女が公用車やタ

クシーではなく、自分で自家用車を運転して登庁することがあるのは何故なのかと、議会で質問されたのだ。これに対して内藤市長は、「コロナ禍の状況にも鑑み、必要最小限の範囲で自家用車を使用する場合がございます」と、答弁したのだが……。

徳島市政関係者が声を潜める。
「内藤市長が自家用車で移動するのは、誰にも行き先を知られたくない。やましい事情があるからではないかと専らのでした」
実際、内藤市長の自家用車は、徳島市内のあるマンションの駐車場に停まっていたところを頻りに確認されている。そこは内藤氏の

それは決してやってはならない――。分かっている、絶対にしてはいけない。頭ではそう理解しつつも、「本能」はまた別物。それが人間というものだ。史上最年少女性市長と、地元紙男性記者の奇妙な関係。以下は「公私の区別」の難しさが身に沁みる、男女の物語。

自宅ではない。そして、「そのマンションへ内藤さんの出入りは月10回程度に及ぶこともあり、昼夜を問わず、彼女の自家用車がマンションの前に停まっています。つい先月(3月)もです」(同)

一体、内藤市長が足繁く通うマンションには何が待っていたのか。
市政事情通が耳打ちする。「内藤市長は、そのマンションに住む徳島新聞の男性記者のもとに足を運んでいたんです。彼女と同世代のその記者は、昨年の市長選に内藤さんが出馬の意向を表明した際、彼女の担当記者として活躍していました。そうした縁もあり、仲睦まじく、なったようです」

異例の「逆夜回り」逆

女性で全国歴代最 「地元紙記者」

「ドライブ好き」の内藤市長(上は記者のマンションを出る市長)



前代未聞、市長による記者宅訪問という「逆朝駆け」「逆夜回り」!?
内藤市長には離婚歴があり、小学生の子どもがいるが現在は独身。当然、彼女がどの男性と親しく、なるのも自由である。だが、

「味方になってくれ」

しかし、徳島市議の加戸悟氏は驚愕の証言をする。「昨年、内藤さんが市長選への出馬表明をした直後の、1月20日頃のことでした。私はその徳島新聞の男性記

男性の「取材記者」と「取材対象者」である女性市長が、記者の自宅で逢瀬を繰り返す。深い仲であることに、ついエロスの匂いを感じ取ってしまうのは「嗅覚過敏」なのだろうか。そうなのかもしれない。

者に電話で呼び出されたんです。午後3時頃だと人もいなくて話しやすいから、市役所12階にある食堂に来てくれ、と」

「その男性記者は、『私が内藤さん付き記者になりました』と説明した上で、『今度の市長選は絶対に内藤さんが勝つ。そばに付いている私が一番分かる』『内藤さんには大物がバックに付いている』『内藤さんの味方になってくれ』と、持ち掛けてきたんです」(同)

昨年の徳島市長選には、結果的に内藤氏に敗れるものの2期目を目指した男性

市長も出馬していた。にも拘らず、徳島新聞のその男性記者は内藤氏に「肩入れ」していたというのだ。

もし、この男性記者のスタンスが内藤市長との、深い仲に由来するものだとしたら、ふたりの脳裏に「記者倫理」あるいは「公私混同」の文字は過ぎらなかつたのだろうか……。男性記者と女性市長。両者の立場ゆえの「危険な関係」には、お節介と承知しつつ気を揉んでしまうのである。そこで内藤市長の心づもりを尋ねようとした際の様子が冒頭に紹介したもので、彼女が男性記者の自宅マンションから出てくる姿を押さえた。証拠を見せようとしても、「現実逃避」を圖つたのだった。

一方の男性記者は、「事実無根です」と言うばかりなので徳島新聞に見解を訊くと、こう回答した。

「職員の個人的な件に関するコメントは控えさせていただきます」

ただきます。なお、弊社では、記者モラルの観点から、選挙担当記者が特定候補者を応援することを厳に慎みます」

件の男性記者が、勇猛果敢にも自宅内で内藤市長に「深く食い込む取材」を繰り返していたとしたら、それを「個人的な件」と言い切れるか微妙なところのようなきもするが……。

いずれにせよその判定は、県内随一の取材力を誇る徳島新聞自身による今後の検証に委ねるしかあるまい。その徳島新聞は、内藤市長の誕生を受け社説にこう記している。

「市民は、若さと女性の視点に市政刷新を託したのではないか。負託にしっかりと応えてもらいたい」(20年4月6日付)

市政刷新にあたり聖域は許されない。内藤市長に期待されるタブーなき改革。努々、タブーなき快感とお間違えなきように。